

泉小中学校
学校便り

地域とともにある学校



3つのよし

「自立(自分よし)」
「感謝・思いやり(相手よし)」
「協働・共生(みんなよし)」

文責：副校長

いずみん

伝統を受け継ぎ、伝えていく

～令和4年度泉小中学校文化祭～

11月18日、平日にもかかわらず、たくさんの保護者の皆様に見守られて、本校文化祭が実施されました。

今回のテーマは「RING～つなげよう みんなの笑顔！青春 festival～」。一人一人の思いをつなぎながら、笑顔あふれる思い出の1ページにしたいという子供達の願いがありました。その願いどおり、各学年の発表は日頃の学習の成果がしっかりと表れる素晴らしいものばかりでした。

小学部1・2年生は、国語教材のスイミーの劇を発表しました。声の大きさ、動き、堂々とした発表態度、トップバッターの緊張も感じられない素晴らしい出来映えでした。



小学部3・4年生は社会科見学旅行で訪れた通潤橋について発表しました。総庄屋の布田保之助と種山の石工たちの、なんとしても通潤橋を造るんだという熱い思いを、声量や動きで発表してくれました。先人の願いに思いをはせ、今後学校や地域のために自分に何ができるのか考えられる上級生になってほしいものです。



小学部5年～中学部1年の伝統芸能発表は「泉姫鬼山太鼓」「岩奥神楽」。泉町は、八代市の中でも有数の伝統芸能がある地域です。その成り立ちや受け継いでこられた地域の方々の思いを子供達もしっかりと感じ取り、練習して発表に臨んでくれました。



発表後、衣装の着付けのお手伝

いに来ていただいた地域の方から、来年への期待を口にしていただき、発表した子供達もやりきった興奮を抑えられないようで、今後につながる素晴らしい発表になりました。

中学部2年は、「職場体験を通して学んだこと」の発表でした。社会に出るとということ、働くということを考え、家族へ感謝の思いを寄せる子供達もたくさんいました。4ヶ月後には、泉小中学校のリーダーとなる2年生、学びの多い2日間を過ごしたことが何え、頼もしく感じました。



そして、最後は中学部3年生の劇「ファーストペンギン」。ファーストペンギンとは、新しい分野であってもリスクを恐れず、先陣を切って挑戦する人を意味する言葉です。卒業を前に進路や友人のことなど様々な思いに揺れ動く3年生の思いが表れた劇だったと思います。これから、一人一人がどのような進路選択をし、夢実現を果たしていくのか、しっかり見守りたいと思います。



また、今回は、泉分校1年の森田馴さん(本校卒業生)による弁論発表もありました。本年度、県の高校生弁論大会で、最優秀賞を受賞した発表です。本校の子供達にぜひ聞かせたいと、わざわざ来ていただきました。地域の伝統文化の継承について、自分の思い、受け継いでこられた地域の方々の思いをもとに、これからの自分自身がどう行動したいのか、堂々と発表してくれました。(発表原稿は裏面にあります。ご覧ください。)

「本屋敷神楽～400年分のタイムカプセル～」
熊本県立八代農業高等学校泉分校
1年 森田 駿さん

「ピーイッ」という甲高い、笛の音色が、神社から、あたり一面に響き渡ります。

鈴や和太鼓といった様々な楽器が、テンポよくリズムを刻み始めると、そでに控えていた踊り手が、ゆっくりと前へ進み、神楽を舞い始めます。どこからともなく人々が集まり、相撲を取り始めると、あちらこちらから「頑張れ」の声。本屋敷神楽、スタートです。私は今、本屋敷神楽、最後の踊り手になろうとしています。

私が住む八代市泉町は、人口約1500人。周囲は壮大な自然に囲まれ、平家の落人伝説の舞台としても語られます。かつては、それぞれの集落に伝統芸能としての踊りが残っていましたが、過疎化が進み、現在、残る伝統芸能はわずか3つ。私が生まれた大道地区の「本屋敷神楽」はその一つです。寛永6年、西暦1629年の旗が神社に残り、400年に渡る長い歴史があります。これまでの伝統として、神楽の踊り手は地区の小中学生の男子とされていました。ですが、そのような子どもはもう、大道地区にはいません。

私が神楽を踊り始めたのは、小学校4年生の頃。父から誘われたのがきっかけでした。「お小遣いがもらえる。」という単純な、子どもらしい理由でした。ですが、年に一度、普段顔を合わせることの少ない地域の人々が集まって、わいわいとしているあの雰囲気、幼い頃から大好きでした。姉と共に毎年、この神楽を楽しみにしていました。

この楽しい神楽はいつまでも続くと思ってた矢先、中学2年生の姉が急遽、神楽を踊ることになりました。本来、中学生以下の男子しか踊れない決まり。人手不足でした。「どうにか本屋敷神楽を残したい。」その思いで、姉は神楽を踊る決意をしました。しかし、この緊急事態も、私にとって、まだ、どこか他人事で、なんの根拠もなく、この神楽はなくならないと思っていました。

追い打ちをかけたのは、新型コロナウイルス感染症。相撲は中止。あの威勢の良い「頑張れ」の声は聞こえなくなり、参加者も明らかに少なくなっていました。姉と私の2人で踊る神楽、境内に響く楽器の音もどこか寂しげです。この時初めて、「こうやって、伝統芸能はなくなっていくのか。」と痛感しました。

伝統芸能が失われる危機感を抱きながらも、何も行動せぬまま、時は経ち、昨年、姉が高校

を卒業し、神楽の踊り手をやめました。ついに、踊り手は、高校生の私一人だけになってしまったのです。400年続く伝統の最後の踊り手となる。どうしたらいいか、本当に分かりませんでした。

そこで、私は、本屋敷神楽保存会の坂田さんに話を聞きに行きました。いつも冗談をたくさん言う坂田さん。ところが、その坂田さんが、見たことのない真剣な表情で神楽の話をするのです。

「今まで色々な人が関わってきたけん、続けないかんたい。俺も馴の父ちゃんも、みんなみんな、小3から中3まで踊ったたい。」

坂田さんの言葉は「これからが頑張れどころだ。」という前向きな言葉ばかりでした。

祖父にも尋ねました。

「昔は子どももたくさんおったから、5歳から踊ったとよ。先輩から後輩へ、ずっとみんなで踊り続けてきた神楽だけんね。これからも残したいね。馴も毎年ありがとうね。」

「みんなで作ってきた。」誰に尋ねても、出てくる言葉は同じ。これまでもきっと、ずっとずっとそうだったのです。「つながり」「ぬくもり」「幸せ」。踊り手が変わるたび、まるで固く固く結ばれ続ける一本のロープのように。そんな400年分の思い。その思いが一度に迫ってくるようでした。経験したことのない熱い気持ちで胸がいっぱいになりました。

伝統芸能の消失。現在、担い手不足が全国各地で生じています。

私は今、中学1年生になる妹に声をかけ、どうにか2人で神楽を踊り続けようとしています。年齢制限の延長などを話し合い、次の踊り手も探しています。同時に、家族・本屋敷神楽保存会の方と協力し、SNSを使って本屋敷神楽を語り継ぐプロジェクトもはじめました。

本屋敷神楽は大道地区の人々の400年分の思いがぎっしり詰まったタイムカプセル。そこに今、私の思いも、詰め込んでいます。語り継ぎたいのは、踊りと音楽と、そしてその時代を生きた人々のかけがえのないつながり。時代は変わろうとも、変わらない思いが確かにそこにはあるのです。私も大道地区に生きる一人として、本屋敷神楽を舞い続け、後世に思いを残していきます。皆さんが残したいものは何ですか。

